



DoKoネット

—同志社大学工学部同窓会報—
(同志社大学理工学部同窓会報)
第10号(2008)



What's New!

名称変更のお知らせ

2008年4月1日より、改組再編により工学部が理工学部と名称変更され、同窓会も、理工学部同窓会となります

2008年度理工学部同窓会総会

2008年4月26日(土) 京田辺キャンパス
11:00～ 総会・講演会(夢告館1階101教室)
12:30～ 懇親会(2,000円 紫苑館食堂)

2008年度第21回理工学部同窓会リユニオン

2008年11月9日(日) 今出川キャンパス

第1部 10:00～ 同志社大学ホームカミングデー2008
第2部 16:00～ 5N卒業年グループリユニオン

—卒業年グループリユニオンの世話を同窓会事務局までご推薦下さい—

2008年度のリユニオン第2部は各卒業年グループごとにお集まり願いますが、特に5N周年(S28, 33, 38, 43, 48, 53, 58, 63, H5, 10, 15年卒業)の方々には特別に企画いただく予定となっております。

詳細は下記ホームページでお知らせします。

ホームページアドレス

<http://dokonet.doshisha.ac.jp/>

このページは工学部同窓会情報のお知らせと共に工学部同窓会リユニオンの企画や卒業生の方々の掲示板としてご利用いただきます。次号同窓会報”DoKo ネット”第11号は2009年3月に発行いたします。バックナンバーはカラー版でダウンロード可能です。皆様の寄稿をお待ちいたしております。



同志社大学工学部同窓会 会長
岡 正太郎

DoKo ネット第 10 号に寄せて

同志社大学に工学部が設立されたのは太平洋戦争後の学制改革の時期でした。1949年に機械・電気・化学の三学科で始まったのでした。その頃から工学部に工学会はありまして論文集の発行や研究グループ（ゼミ）の支援などをしながら同窓会の役割をも兼ねていたように思います。現在の同窓会は1995年にこの工学会から分離して改めて発足しました。それから今日まで約13年の月日が経ちましたが、実質10年という短い期間に歴代会長ならびに幹事の諸賢には大変なご尽力を賜り、そのお蔭でようやく組織運営の基盤が固まってきました。即ち今後我われ同窓会の走るべき軌道が敷かれたと思っています。

「どのような軌道が敷かれたか」その骨子を列記しますと

① 会則の制定

会員を明確に定義し、同窓会活動の目的（会員相互の親睦・工学部と共に発展）を明示するなど重要な方針が決められました。

② 幹事会の充実

幹事を増員して学内外から選出し、その分担を決めました。幹事長を中心にしてまた同窓会事務局を強化して諸作業の促進と活性化を図っています。これによって会員の意向を広く吸収できる組織になりました。

③ 会員相互交流の促進

会員名簿を発行しました。徹底した個人情報保護の機能を織り込んだCD形のコンパクトな名簿が完成しました。また、リユニオンでの活動の強化や機関紙「DoKo ネット」の充実を図りました。さらに工学部研究グループ（ゼミ）との連携や、東京支部発足を目指した打ち合わせ、学外諸団体（たとえば早稲田大学同窓会）との接触に努め、会員が行動しうる環境の拡大に努めています。

④ 同窓会運営資金の確保

大学事務局の協力を得て工学部新卒業生（新入会者）に入会金として5年間分の会費を一括して前納して頂くシステムを2006年度より実施しました。これによって、従来からの会員による郵送振込による年会費と合わせて十分とは云えませんが毎年の活動資金を何とか賄えるようになりました。

などが挙げられるでしょう。要するに「本会の目的に沿った提案を速やかに受け入れ適切な企画と予算を付して実行し、成果を評価・公開する」という組織運営の軌道が出来上がりました。これからはこの軌道の上に同窓会事業の具体的なプログラムをのせて邁進することが出来ます。

1949年に三学科で発足した母校の工学部はキャンパスを今出川から京田辺に移して成長し、2008年度からは再編して理工学部と名称を変更します。工学部同窓会も理工学部同窓会になります。さらに2008年4月からは医工学科・医情報学科・医生命システム学科の三学科体制の生命医科学部とスポーツ健康学部が新設され工学部からもそれぞれ13名と2名の先生方が移籍されます。このような素晴らしい発展に呼応して我われの同窓会も大きく成長することを期待して止みません。

元島津製作所専務取締役（1952年機械学科卒）

[写真は2007年度工学部同窓会総会挨拶中の岡会長]

学科紹介

インテリジェント情報工学科・情報システムデザイン工学科

2007年度は知識工学科(現インテリジェント情報工学科)が発足して14年目で、1年生104名、2年生124名、3年生112名、4年生91名の合計431名が在籍しています。また、2004年度に設置された情報システムデザイン学科は完成年度を迎え、1年生85名、2年生112名、3年生107名、4年生138名の合計442名が在籍しています。一方、知識工学専攻の博士課程(前期)には107名が、博士課程(後期)には10名が在籍し、日夜研究に励んでいます。尚、2008年度より大学院知識工学専攻は、インテリジェント情報工学科・情報システムデザイン学科両学科の進学先として、情報工学専攻に名称変更します。就職については、明るい状況が続いており、殆どの学生が就職先あるいは進学先が決まっています。教員の動きとしては、齋藤誠慈教授が着任されましたが、2008年度には、工学部は理工学部に改組され、そこに新設される数理システム学科に岡崎龍太郎准教授とともに移籍されます。また、2008年度に新設される生命医科学部に力丸裕教授と廣安知之准教授が移籍されます。そして、2005年度より知覚・認知機構研究室で教育研究指導をされてきました佐々木康成専任講師は2008年3月で退職されます。さらには、情報システムデザイン学科の橋本雅文教授がインテリジェント情報工学科に移籍されます。以上の結果、2008年度からの研究室体制は以下のようになります。<インテリジェント情報工学科>情報数理工学(渡辺陽一郎教授・程俊准教授)、情報システム学(金田重郎教授・芳賀博英准教授)、知識情報処理(河岡司教授・渡部広一教授)、知的機構(柳田益造教授・坂東敏博准教授)、知的システムデザイン(三木光範教授)、知能メカトロ情報システム(橋本雅文教授)、<情報システムデザイン学科>社会情報学(下原勝憲教授・Ivan TANEV 准教授)、知能メカトロ情報システム(高橋和彦教授)、共創情報学(片桐滋教授・大崎美穂准教授)、応用メディア情報(大久保雅史教授・土屋隆生教授)、ネットワーク情報システム(佐藤健哉准教授・小坂隆浩専任講師)、音声言語処理機構(山本誠一教授・鈴木智也専任講師)。

2000年度から始まった学術フロンティア研究プロジェクト「知能情報科学とその応用」、引き続き、2005年度からの「人間と生物の賢さの解明と。その応用」では非常に多数の成果を上げ、本年度で終了となります。活動の一部は、<http://www.afiis.doshisha.ac.jp>でご覧いただけます。教務主任 渡部 広一

電気工学科・電子工学科

電気工学科、電子工学科は2008年度から定員をそれぞれ75名と85名として、新カリキュラムを制定しました。大宮眞弓教授、渡辺好章教授、松川真美教授、和田元教授の4名の先生方が新学部の医情報学科へ移籍され、渡邊芳英教授は新しい理工学部の数理システム学科へ移籍されます。大学院専攻名も今までの電気工学専攻から電気電子工学専攻(Electrical and Electronic Engineering)と変更されます。松川真美教授、和田元教授の両先生は大学院工学研究科所属として今まで通り学生指導を頂きます。生命医科学部の大学院担当として電気系からは長岡直人教授、出口博之教授が移られます。理工学研究所へ移籍された成田真二教授と実験実習センターの野田純一専任講師のお二人が3月でご退職されます。新しく4月から大谷直毅准教授(光デバイス)、木村恭之助教(物理学)、向平敦史助教(数学)、佐藤祐喜助教(電気電子材料)が着任されます。

新しいカリキュラムでは電気・電子工学に関連する基礎知識・技術に加え、最先端技術にも十分対応できる先端的な知識と技術、研究資質の修得を基本的な教育目標としています。数学、物理、基礎電気理論を重点的に教育し、これを基礎としてインフラストラクチャ、パワーエレクトロニクス、光・電子デバイス、情報通信の各分野について研究・教育を行っています。電気・電子工学の最先端分野で活躍する研究者や技術者を招いた特別講義を設け、ダイナミックな技術発展を実感できるようにしています。実験を重

学科紹介

視した体験的な学習により問題解決能力の向上を図り、ダイナミックな技術革新に柔軟に対応でき、独創的で高度な研究開発能力を有するエンジニア、研究者を育成します。

教務主任 粕谷 俊郎

機械システム工学科・エネルギー機械工学科

機械システム工学科とエネルギー機械工学科は218名の卒業生を送り出します。86名は本学大学院に進学します。また、博士前期課程修了は90名です。学部、院を問わず、今年も昨年同様、就職率100%が見込まれますが、特定の企業・分野への就職が集中しているのが気にかかるところです。今年も大学院修了者の多くは、国内外で活発な研究発表を行ってきました。また、著名な学会で優秀講演賞なども受賞しており、研究の水準の高いことが伺い知れます。

2008年度からは学生収容定員変更で、新一年生は、機械システム工学科90名、エネルギー機械工学科70名となります。従来は2学科計215名だったので約25%減となりますが、去る2月上旬に行われた一般入試では両学科計2700名もの応募者がありました。その結果、機械システム工学科の個別日程試験では実質倍率5倍の狭き門となっています。学部・学科再編に伴い、4名の専任教員の方々（片山傳生教授、横川隆一教授、田中和人准教授、積際徹専任講師）が医工学科（生命医科学部）に移籍されます。また、四月から理工学部に開設される数理システム学科に押目頼昌教授が移籍されます。その結果、機械系では20名の専任教員と2名の任期付教員で両学科・大学院工学研究科機械工学専攻の教育・研究を担うこととなります（当面の3～5年間は経過措置として3名の任期付教員が加わります）。

2008年3月31日をもって御牧拓郎教授、松岡良明実験実習センター講師、則元京教授、柴田浩客員教授の先生方が退職されます。御牧先生、松岡先生のお二人にはいずれも41年、40年の長きに渡って教育・研究にご尽力頂き、則元先生には「竹の高度利用研究センター」設立に際し京大よりお越し頂き持続的再生産可能天然資源の工業的利用を中心に教育、研究に、柴田先生には、原敬先生（現名誉教授）退職後の制御系分野の教育と研究にご尽力頂きました。

教務主任 藤井 透

機能分子工学科・物質化学工学科

2008年度から化学系の両学科名が変わります。機能分子工学科が「機能分子・生命化学科」に、物質化学工学科が「化学システム創成工学科」になります。これまで同様に基礎学力を養う教育を徹底するとともに、時代のニーズにあった考え方、対応ができる人材の育成を目指していきます。

化学系では11月末時点で998名の学部生と167名の博士課程前期課程院生ならびに7名の博士課程後期課程の学生が在籍しています。内訳は、機能分子工学科では、1年生137名、2年生128名、3年生以上卒論未配属を含め160名と卒論配属生90名を合わせて515名、物質化学工学科では、1年生121名、2年生107名、3年生以上卒論未配属を含め154名と卒論配属生111名を合わせて483名となっています。また、工業化学専攻では今年修士1年生として95名が加わりました。就職は昨年度から引き続き比較的良好な状況です。このように、出口は好転の兆しを見せつつあるものの、入口は、昨今の少子化の影響は如何ともしがたいところがあります。また、入学生が新課程の教育を受けてきていることから、どのように学生を育てるかに腐心しているところではございますが、学部教育では、時代の要請であります教員のFD活動を積極的に行い、工業化学専攻では、外人教師による英語授業（必修科目）を取り入れ writing, reading, presentation の能力強化をはかるようにしました。今後とも入口と出口共々、卒業生の皆様のご支援を切にお願い申し上げます。

学科紹介

4月から伴貴彦先生を物質化学工学科に迎えました。この結果、物質化学工学科は昨年同様7研究室体制、分子化学工学（塩井章久准教授、伴貴彦助教）、粉体工学（日高重助教授、白川善幸准教授、下坂厚子実験講師）、移動現象（森康維教授、土屋活美教授）、計測分離工学（中島理一郎教授、塚越一彦教授、田村隆実験講師）、生物化学工学（近藤和生教授、松本道明教授）、材料システム（高野頌教授、伊藤正行教授）、数理解析（堀内龍太郎教授）で動いております。機能分子工学科は、物理化学（上野正勝教授、伊吹和泰教授）、電気化学（田坂明政教授、稲葉稔教授、竹村英明実験講師）、機能有機化学（加納航治教授、小寺政人教授）、高分子化学（東信行教授、古賀智之准教授、松本孝広実験講師）、無機合成化学（廣田健教授、加藤将樹准教授）、有機合成化学（太田哲男教授、大西慶一郎実験講師）、数理解析（溝畑潔准教授）です。今年度からは、助教授は准教授、これまでの助手は助教と呼び方が変わりました。

2008年3月には、中島理一郎教授、竹村英明実験講師が退職されます。長年、工学部での教育のみならず研究にもご尽力いただきましたことに、心より厚く御礼申し上げます。
教務主任 塚越 一彦

環境システム学科

2004年度に開設された環境システム学科も完成年度を迎え、2008年3月に最初の卒業生を送り出します。第1期生のほぼ半数は本学の工学研究科数理環境科学専攻や新設の生命医科学研究科、あるいは他大学の大学院へと進学する予定です。就職活動についてもたいへん好調で、環境関連産業や一般企業を中心に多様な舞台での活躍が期待されます。現在は、地球システム科学（林田明教授・福岡浩司准教授）、環境保全・防災科学（増田 富士雄教授・横尾頼子専任講師）、新エネルギーシステム（伊藤靖彦教授）、環境システム工学（盛満正嗣准教授）、生命環境保全（野口範子教授・光田重幸准教授）、運動機能・生理学（井上望教授）、人間環境（山下正和教授）といった研究室でそれぞれ卒業論文の作成に励んでいます。

本学科は、自然科学分野の横断的な知識をもとにして地球と生命に関わる複雑なシステムを探求し、自然環境の保全や循環型の資源・エネルギーシステムの構築、豊かな生活環境の創造などに貢献できる人材を養成することを目的とし、理工学全般の基礎となる「基礎・共通科目」を初年次に、「地球環境分野」と「生命環境分野」の2領域の選択科目を高年次に配置した教育を行っています。このうち主として生命・医療系の教育研究を担当している井上望教授と野口範子教授は、2008年度から生命医科学部の所属となります。そこで本学科では、生物学を基礎として地球上の生命と自然環境の保全に取り組む分野や、特定地域の環境変化や人間社会のあり方などを研究する地域環境科学分野の充実を図る予定です。また、2008年度の工学部から理工学への改組再編に合わせ、自然環境についての理解を深めるための理学系科目と自然科学の成果を人間社会に生かすための工学系科目をそれぞれ充実させ、それらの履修状況によって「工学士」または「理学士」が取得できるカリキュラムを提供します。

なお、環境システム学科の学生の主要な進学先である数理環境科学専攻（修士課程）は、2009年度に博士前期課程と博士後期課程からなる専攻へと変更される予定です。ここには環境科学コースと数理科学コースを設け、それぞれの領域で学部・大学院一貫教育を充実させるとともに、ユニークな学際領域の発展を目指す計画です。
教務主任 林田 明

数理環境科学専攻

昨年のDoKo ネットで、数理環境科学専攻の様変わりの予感を述べましたが、事態はそれを大きく超えて、2009年度の大飛躍に向けての助走が、全ての他専攻の協力の下、開始されました。その第一弾として、2008年4月には、新設の数理システム学科に着任の名古屋大学名誉教授の三井斌友先生を本専攻

学科紹介

の専任教員にお迎えし、また、若手を大いに抜擢して、齋藤誠慈教授（現インテリジェント情報工学科、次年度より数理システム学科）、盛満正嗣准教授、福間浩司准教授に講義委嘱します。2006年度末をもって、谷川徹教授が退職され、2007年度末には井上望教授が新設の生命医科学研究科に移籍されます。このように本専攻では、人の動きが激しくなっていますが、これは文字通り新たな数理環境科学専攻に生まれ変わり大きく成長しようとしていることの表れです。全ての人件の固まる2009年度末に発行されるDoKoネットの本欄が今から楽しみなくらいの、教員組織の充実が見込まれています。

上にも述べました新設の数理システム学科は、環境システム学科ともども本専攻に対応する学部組織とすることが、全学的に了承されています。従いまして、2011年度の数理システム学科完成をもって、本専攻は、その名称の数理と環境の両分野の学部組織を有する一貫教育体制が完成します。現在は、2009年度の博士課程前期・後期課程への課程変更に向かって、工学研究科全体のご協力の下、前努力を傾注しています。上にも述べましたように、2009年度には、さらに多くの先生方を本専攻の専任教員としてお迎えし、強力な教員体制が確立される見通しです。工学部は2008年度に理工学部にも再編されます。その「理」の大きな部分を担うのが、環境システム学科と数理システム学科です。それに伴いまして近い将来工学研究科も理工学研究科に衣替えをするはずです。その際に「理」の部分の担うのが我々であることは当然です。そういう意味で、これからの本専攻の責任も極めて重大です。

在学生は、修士1年が27名、修士2年が30名です。次年度は、所属は数理環境科学専攻ですが、研究指導は出身の工学部の他系列で行うというある種のねじれであった永年続いたUターン制度が終わり、全てが自前の学生になる初年度で、出願者数が心配されましたが、優に30名を超え、うれしい悲鳴です。

就職は、例年通り非常に良く、本専攻が社会にその存在を認められてきた証と考えています。OB、OG達がリクルータに抜擢され卒業生を求めてホームカミングしてくれます。最近就職先から米国のビジネススクールにMBA取得のために派遣留学生に選出されたとうれしい報告をしてくれた卒業生もいます。いずれにせよ、本専攻は、変革の奔流の中で力強く頑張っています。卒業生の方々の応援、ご支援を賜りたいと思います。 専攻教務主任 大宮 眞弓

2008年度理工学部就職委員

	担当者	就職委員室	連絡先
情報系学科	下原 勝憲	有徳館東館 YM-223	Tel:0774-65-6249, Fax:0774-65-6809 Email:js-kou1@mail.doshisha.ac.jp
電気系学科	笹岡 秀一	有徳館西館 YE-513	Tel:0774-65-6246, Fax:0774-65-6806 Email:js-kou2@mail.doshisha.ac.jp
機械系学科	藤本 元	有徳館東館 YM-103	Tel:0774-65-6247, Fax:0774-65-6807 Email:js-kou3@mail.doshisha.ac.jp
化学系学科	土屋 活美	至心館 SC-207	Tel:0774-65-6248, Fax:0774-65-6808 Email:js-kou4@mail.doshisha.ac.jp
数理環境科学	山下 正和	報辰館 HS-105	Tel:0774-65-6250, Fax:0774-65-6250 Email:js-kou5@mail.doshisha.ac.jp

就職関連資料室: Tel:0774-65-6240, Fax:0774-65-6805

ひとことエッセー

同志社大学バイオメティックス研究センターの終了にあたって

バイオメティックス研究センター長 加納 航治

同志社大学バイオメティックス研究センター (BMRC) が活動を開始して早くも5年の歳月が流れました。本年3月をもちましてセンターとしての活動は終了致します。この5年の間に内外の多くの研究者との交流を持つことができました。センターの大きな目標として、学術研究・教育の国際化を掲げてまいりました。これまでに2回の国際会議、ワシントン大学でのワークショップ、および日仏ワークショップを開催いたしました。2007年12月にはセンター最後の国内研究者による講演会を企画いたしました。この講演会は期せずして半国際会議の性格を持つことになりました。これもBMRCがこれまで努力してきました国際化志向の成果の表れということが出来ます。このほかにも学生および教員を対象とする小さな特別講演会を多数開催しました。講演会、国際会議、ワークショップ等の内容につきましてはBMRCのホームページ

(<http://www1.doshisha.ac.jp/%7Ekkano/BMRC%20HomeJ.html>)

を見ていただきますとお分かりいただけると思います。BMRCの具体的な成果としましては、リール国立化学大学院大学 (フランス)、ポールセザンヌ大学 (フランス) およびザールランド大学 (ドイツ) と学生交流協定を結ぶことができたことが挙げられます。また、本学大学院博士後期課程の優秀な学生を顕賞し (BMRC Award)、勇気付けることができましたのも、このセンターの果たせた大きな成果だったように思います。

BMRCはCOE申請時の理念を活かすべく5年の時限で設置されましたバーチャル研究センターでした。設立当初は400万円の年間予算で何ができるのかと心配いたしました。極めて自由に講演会や国際会議を企画し、開催できることは、予想外に大きな効果をもたらすものであることが次第に分かってまいりました。年1回ではあっても世界最先端の研究者を本学にお招きして、刺激的な国内、国際講演会を開催し、同時に本学のみならず、他大学の教員、学生によるポスター形式での研究発表を行うことは、研究者間の交流を深め、かつ良い意味での競争心を煽ることとなり、非常に有意義でありました。同時に、同志社大学の学生や教員の質の高さ、さらには京田辺キャンパスの素晴らしい環境と設備を、参加された多くの人々に知っていただくことができましたことも、大きな成果の1つとして挙げる事ができます。2007年12月に開催しました講演会は、生命や医学に関連する分野を取り上げ、様々な分野の研究者の講演を聞くことができました。参加された学内外の方々から、非常にユニークで有意義な講演会であったとの評価を得ました。仲間内の集まりにはそれなりの意義がありますが、少し分野を異にする研究者の講演を聞くことにより、全く新しい発想が生まれるような兆しを感じる事ができます。このような感覚を持つことの大切さを再認識させられました。

今回、BMRCのお世話をさせていただいて、このような研究センターを軸として国内外の研究者と広く交流することの有用性、必要性を痛感させられました。当初から5年で消滅する運命でありましたので、BMRCの継続は望むべくもありませんが、できれば少し切り口を変えて、新たなセンターが設立されることを切望しております。

最後に、工学会とBMRCについて若干触れさせていただきます。多くの講演会は、工学会メンバーである在校生の授業の一貫として開催いたしましたので、多くの大学院生と学部学生 (3, 4年生) が参加してくれました。さらに、近隣の大学には相当数の本学卒業生が大学院生、ポストドク、あるいは助教として在学、勤務しております。これらの卒業生諸君も積極的に講演会に参加してくれました。卒業してからも本学と知的なつながりを、センターを通して持ち続けられることも、センターの大きな意義であったと改めて認識しております。

(1966年工業化学科卒。1972年博士課程修了)

ひとことエッセー

電気工学専攻「電力・通信インフラ研究者・技術者養成課程」開設

文部科学省支援「インフラ課程」プログラム代表 雨谷 昭弘

上記「インフラ課程」プログラムは文部科学省の大学院改革支援プログラムとして採択され、2007年10月から活動を開始（終了2010年3月）し、同志社大学インフラストラクチャー研究センター（Infrastructure Research Center = IRC, 所長 雨谷）をベースとし、その研究成果を大学院教育に反映することを目指しています。

既存の大学院履修課程と比べ、下記のような特徴があります。

1. Advanced Course of Infrastructure Engineering（インフラストラクチャー工学特論）

世界各国のインフラ（電力、通信、水道、ガス、鉄道、建築等）の実状について海外の関連分野教授陣による英語でのリレー講義、初年度は上記IRCの海外研究員を中心に講義を実施。

2. 院生の海外インターンシップ

上記講義登録院生が4週間のインターンシップを海外の大学、企業等で実施するもので欧州、北米の場合、1人40万円程度が予算化されております。本年度は9名の院生が2008年1月から3月にかけて主に、上記IRCの共同研究機関（上記講義教授陣の所属機関）へ出かけることが決定しております。具体的には下記の機関です。University of Bologna(イタリア), Technical University of Helsinki(フィンランド), Cardiff University(イギリス), University of the West of England(イギリス), Ecole Polytechnique Montreal(カナダ), National Seoul University(韓国)以上IRC, 椿本チェーン/トヨタ(米国, カナダ), Rutgers University(米国, 2名)

3. ワークショップ

従来、大学院では学部のような学生実験は講義として設定されていませんが、院生アンケートの結果で大学院でも実験科目があればいいとの希望に基づくもので、2008年度4月から実施します。具体的には、電力・通信分野の機器の設計・製作を行うものです。

上記3項目の内、特に第1項のインフラ工学については文部科学省も我が国の大学院における新規工学分野および科目として注目しており、また世界の大学改革の原点として有名な「ボローニャ宣言(Bologna Declaration)」のUniversity of BolognaからもChallenging!!との評価を得ており、同大学International Department担当者の本学訪問の話も出ております。

文部科学省の意向に沿う形で、2008年4月から学部の電気工学科にインフラコースを設置すると共に、大学院ではインターンシップ(2単位)、ワークショップ(2単位)を新設します。学部インフラコースは、本プログラムへの進学者の確保を目指すものであり、同時に電気工学系の学生の主要な就職先となっている関西電力、東京電力等の電力会社、大阪ガス、東京ガス等のガス会社、JR西日本、NTT、更に建設・設計関連会社等の技術分野を意図したものでもあります。

本プログラム実施における大きな問題点として

1. インターンシップ実施, Advanced Course of Infrastructure Eng. 担当海外研究者との連絡, 講義内容, スケジュール決定等の業務を行うコーディネーター人材の確保が容易でないこと。

2. 文部科学省と本学での経理規程, 雇用規程の差異。

等があり、その調整に多大の時間を取られることが挙げられます。これは新規事業の初年度としては止むを得ない面もありますが、大学としてCOE, GP等へ対応する事務組織があればと痛感しています。

(1966年電気工学科卒. 1968年修士課程修了)

ひとことエッセー

着任のごあいさつ

齋藤誠慈

このたび工学部情報系列の数理モデル研究室に着任し、解析学を担当しています。また2008年に工学部改組後の理工学部「数理システム学科」(新設予定)に移籍します。

この挨拶文執筆が依頼された頃、ある新聞記事を読みました。題目および内容を抜粋します。「世界は意外に高評価」(日本は世界の人々から高い評価を得ている)・「最も世界に良い影響をもたらしている国は日本とカナダが1位」(英国放送局と米国大学との共同世論調査2007年3月)・「日本は経済力に見合った重要な役割を国際社会で果たしている(米国世論調査で83%を記録)」(外務省調査2006年2-3月)・「最良の観光客は日本人が1位」(米国ネット企業による欧州ホテル関係者対象の調査2007年5月)・「日本が打ち出した中東支援策は、国際社会の支援モデル」(英国政府報告書2007年9月)-このような高い評価の背景には、技術力の高さ、ポップカルチャー(マンガなど)普及への貢献、海外旅行における行儀良さの3点があると記事は述べています。さらに、歴史認識を巡って中・韓国とはしばしばあつれきが生じ、大きく取り上げられることがあるたびに、日本人は国際イメージが悪いと自身が信じてしまうことがあります。いずれにしても、江戸・明治時代と第2次世界大戦後の復興期を通して、先人の弛まぬ努力と尊い献身とがあればこそ今日の日本があると言えましょう。

研究発表のために、アジアの国々に出かけ、中国、韓国、台湾などで若い研究者に会い市井の中で様々な人々に接することがあります。いつも力強さを感じ、また繊細にして成長を望む有様を目にします。小平邦彦(1954年フィールズ賞受賞)は著書「怠け数学者の記」で「数覚」という「自然現象の中の数学的現象を知覚する感覚」を述べています。数覚は必要なくとも、数量的センスは社会の中で就業活動に役立つように思われます。

建学の精神を有する同志社大学に着任したことは望外の喜びであり、また無限ともいえる若人の可能性を幾重にも伸ばす一助となればと思います。古を学んで尊び真理を守り「自覚と誇りを矜持し」、数量的センスに富んだ卒業生を送り出したい気持ちでいっぱいです。これを以てご挨拶と致します。

生命医科学部へ移籍される先生方より

医工学科

・ティッシュエンジニアリング研究室

環境システム学科 井上望

環境システム学科では運動器の生体工学・生体材料を中心とした教育・研究に携わってきました。新設される生命医科学部の医工学科におきましては、生体工学を基礎としたティッシュ・エンジニアリングに関する教育・研究を行う予定です。生体工学の基礎となる学問体系はあくまでも工学でありますので、新学部に移籍後も理工学部と密接な関係を保っていきたく望んでおります。今後ともよろしくお願いたします。

・バイオメカニクス研究室

機械システム工学科 田中和人

2005年に入社しわずか3年しか経っておりませんが、この度、2008年4月生命医科学部医工学科に移籍することとなりました。教育や研究内容が新しい分野に広がることを楽しみにしております。バイオメカニクス研究室で、機械工学と生命医学の融合領域のバイオマテリアルや機械構造用材料等の破壊機構解明と信頼性確保、マイクロマテリアルの創製と機械的特性評価技術の開発、環境調和型先進複合材料の成形技術開発と強度評価などの研究開発を進める予定です。大学院につきましては、

ひとことエッセー

今後も工学研究科でお世話になりますので、よろしくお願いいたします。

・メディカルロボティクス研究室

エネルギー機械工学科 横川隆一

2008年4月から生命医科学部医工学科へ移籍することになりました。教員として19年間工学部でお世話になりました。大学入学時から考えると、26年になります。この間、工学部では、1994年の京田辺移転、新学科の増設と大きな変化がありました。私も多くのことを学ばせていただきました。工学部の先生方、卒業生の皆様のおかげであると心から感謝しています。建築中の生命医科学部棟(医心館)がその姿を現しつつあるのを見ると、心身ともに引き締まる思いです。卒業生の皆様からのご教示、ご助言をいただき、理工学部とともに、京田辺キャンパス、同志社大学のさらなる発展に寄与できれば幸いです。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

機械システム工学科 積際徹

2006年4月に母校である同志社大学に戻らせていただき、早くも2年が過ぎようとしています。この間、工学部でお世話になっておりましたが、次年度より、新たな理系学部として開設される生命医科学部に移籍することとなりました。生命医科学部では、すべてが0からのスタートになりますが、先生方、そして学生のみなさんと共に新しい学部を作り上げていくという「志」を抱きながら、期待に胸をふくらませています。所属する学部は変わりますが、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

医情報学科

・生体情報研究室

機能分子工学科 太田哲男

21と94、この使い分けがわかりません。これが8年来の悩みです。13年間在籍させていただいた工学部機能分子工学科から、この度旅立ちます。古川名誉教授に色々ご指導いただき、故伊藤客員教授には何かとご配慮いただき、機能分子工学科の皆様からは温かい目で見守っていただきました。その間、胴回りとお腹はすくすくと成長し、部屋の中は混迷一途をたどっています。

発つ鳥、跡を濁さず、を心して、新学部で足手まといにならぬよう努力するつもりです。お世話になりました。

・超音波エレクトロニクス・生体計測研究室

電子工学科 渡辺好章

このたびの生命医科学部の設立は、校祖新島の「人間を救うには霊肉両面より行うことが必要である」として、知育に加えて医学教育の重要性を説いた本学の設立理念に沿ったものであり、同志社大学を、より内容の充実した総合大学へと変革する大きな一歩となると確信しております。新しい学部では、理工学部を中心とした理系学部群と密接に連携することによって、京田辺キャンパスを、現代総合科学の情報発信源としてのサイエンスヒルとすべく努力する所存です。

同志社大学工学部が設立年に生まれ、電気系の中で最も伝統がある研究室を継承させていただいていることもあり、工学部には強い愛着をもっております。今後とも工学会には卒業生の一員として引き続きお世話になることをうれしく思っております。工学部同窓会の今後のますますのご発展をお祈りいたします。

・非線形応用数理研究室

電気工学科 大宮眞弓

永年の国立大総合科学部というぬるま湯と、1997年夏着任前8ヶ月の米国南部ディーブサウスの暮らしの中でなまりきった感覚のまま、工学部の奔流に飛び込み溺れる間もあればこそ、今度は

ひとことエッセー

10年で生命医科学部への移籍となった。どうも隠されたポテンシャルがあるらしく、私の人生の後半には急激な加速がかかっているようだ。閑話休題、工学部の10年は実に快適だった。その間のレポートとして今春「非線形波動の古典解析」と言う書物を上梓できた。私の遺言として一読賜れば幸いです（体の良い宣伝）。お世話になりました。

・知覚・認知脳神経機構研究室

インテリジェント情報工学科 力丸裕

1994年に設立された知識工学科に赴任したのは、1995年4月であった。神経系の情報処理機構についての教育と研究を行うためであった。私は聴覚研究が専門であったので、聴覚系に特徴的な音信号の「時間情報」の超低速実時間処理に着目していた。まず、霊長類を用いた実験を開始した。その後、翼手類の生物ソナー機構の研究を再開し、齧歯類のコミュニケーション音声にも手を広げ、それぞれの分野で面白い成果が誕生した。年月が矢のように過ぎ去り、気がついてみれば早13年が経過していたわけである。お世話になりました。

・医療情報システム研究室

インテリジェント情報工学科 廣安知之

廣安が同志社にお世話になって丁度10年がたちました。その間、学科の名前が変わり、情報系の学科が増え、情報系中心の学術フロンティア事業が走り、日本一のPCクラスタを構築することもできました。在外研究で海外にて研究することもでき、リエゾンオフィス・知的財産センターでの仕事も始まりました。めまぐるしく色々なことが変化した10年でしたが非常に多くのことを勉強させていただきました。これから医療・生命系の新たな分野に展開していきますが、理工学部との連携が必須です。ますますよろしく願いいたします。

・物理学研究室

電子工学科 和田元

14年間と言う長期間、お世話になりました有徳館西館から、生命医科学部の新たな建物に移動します。幸運にして退職まで生き存えたとして11年、新たな学部の物理教育を担当することになりました。とは言え、当面は二回生以上の工学部科目と、大学院の科目を担当しますので、まだまだ工学部にご迷惑をかける予定です。生命医科学部は、ある意味で理工学部の分家のようなものだと思います。本家理工学部の足を引っ張る分家とならぬよう、一日も早いひとり立ちを目指します。OBの皆さんも是非一度、分家を覗きにお越し下さい。

医生命システム学科

・システム生命科学研究室

環境システム学科 野口範子

来年度から生命医科学部医生命システム学科へ移籍いたします。工学部では3年という短い期間でしたが、お世話になりました。私は京都市内で生まれ育ちましたので同志社大学に親しみがありましたが、実際にお仲間に入れていただいて最も印象に残りましたのは、多くの教職員の方が心から同志社大学を愛しておられるなあというものでした。その一方で、よそ者であった私を暖かく受け入れていただき、疎外感をもつことなく受け入れていただけたことに大変感謝しております。新学部に移りましても同じ大学人として同志社大学の発展に少しでも貢献できればと祈念しております。

同窓会活動・リユニオン

2007 年度工学部同窓会幹事会記録

- 2007 年 3 月 22 日 11 時から卒業式に先立ち紫苑館 2 階教職員ラウンジにて新任の同窓会委員懇談会を開催した。
- 2007 年 4 月 29 日の総会開催に先立ち 2007 年度第 1 回幹事会を開催し、総会の議題について審議を行った。
- 2007 年 7 月 21 日に第 2 回幹事会を開催し、工学部の理工学部への名称変更に伴い、同窓会の名称変更と規約の改正について審議した。
- 2007 年 11 月 4 日工学部リユニオン開催に先立ち、第 3 回幹事会を開催し、臨時総会の議題について審議を行った。

2007 年度工学部同窓会総会の報告

2007 年 4 月 29 日京田辺キャンパス夢告館 101 番教室で開催され松岡 敬（工学部長・教授）「理工学部への名称変更と新体制について」のご挨拶をいただきその後以下の議事を審議。

(1) 2006 年度事業報告, 2006 年度会計報告, 2006 年度事業計画, 2007 年度予算案を承認した。

(2) SNS β 判が立上がり現在検証中である。事務局の交代があり今後事務局の強化を検討する必要がある。同窓会活動を活性化するために東京支部の立上げを検討している。

その後、講演会を開催し、雨谷昭弘教授より「海外における電力技術と教育」のご講演を頂き、その後、場所を生協食堂に移し懇親会を行い、参加者の交流の場を持つことが出来た。



講演会場風景



講演の雨谷昭弘教授



総会時の会長挨拶



懇親会風景

同窓会活動・リユニオン

2007 年度工学部同窓会臨時総会の報告

2007年11月4日(日)リユニオンに先立ち臨時総会を開催し、工学部の理工学部への名称変更に伴う、同窓会の名称変更と規約の改正について承認された。

第20回工学部同窓会リユニオンの報告

2007年11月4日(今出川キャンパス・「同志社大学ホームカミングデー2007」と共催)で開催し、

① 多根井 文男(元堀場製作所)

「いやならやめろ, おもしろおかしく自今生涯」

② 太田 哲男(工学部 教授)

「有機物の化学-不斉合成など」

の講演をお願いして 工学部の同窓会らしい交流の場を持つことが出来た。また、本年は卒業生の方々の作品を展示するコーナーを設け、6名の方に出品頂いた(下記の出品リスト参照:工学部同窓会ホームページにも写真がでています)。

出品リスト

木枝燦(名誉教授) デッサン習作[額縁:710×900mm]

網島貞夫(名誉教授) 昆虫標本5点[ケース:600×400×50mm]

高橋三郎(故人:1950年機械卒) 水彩画5点

1. 上富良野 2. 段々畑 3. 麦春 4. 初鰹 5. 高原の秋 [額縁:420×510mm]

平林正久(1952年機械卒) 写真4点 1. スズラン 2. シンピディウム 3. クジャクサボテン 4. カタクリ [額縁:240×350mm]

則光賢治郎(1952年機械卒) 写真2点 1. 山葵畑の朝 2. 山葵畑の見学会 [額縁:400×500mm]

高井圭一(1952年機械卒) 写真2点 1. 氷河 2. 秋の嵐山 [額縁:415×510mm]

2008 年度理工学部同窓会総会のご案内

2008年4月26日(土)京田辺キャンパスの正門近くの文化情報学部の研究室のある夢告館教室にて開催いたします。5月のゴールデンウィーク前に開かれる総会は会員の縦の交流としてゼミの同窓会を考えた2次会をご計画くだされば幸いです。

講演会は北垣宗治(同志社大学名誉教授, 元敬和学園大学学長)先生にお願いし、演題は「理化学校をめぐる人々-ハリス, 下村, デイヴィス」 レジューメ: 新島襄の晩年に米国のクリスチャン実業家 J. N. ハ

リスが、キリスト教主義に基づく科学技術教育を支援するため、同志社に10万ドルの寄付を申し出たことは、当時として画期的なことであった。これには同志社の宣教師だったラーネッドやデイヴィスの存在を無視することができないが、更には米国に留学中の同志社の卒業生、下村孝太郎に対する、ハリスの信頼がきわめて大きかったことも大きく寄与している。設立後の理化学校をめぐるトラブル等についても紹介頂きます。参加申し込みは裏表紙参照ください。



北垣宗治同志社大学名誉教授

2008 年度第21回理工学部同窓会リユニオンのご案内

秋の、2008年の第21回理工学部同窓会リユニオンは11月9日(日)今出川キャンパスにて昨年と同様大学のホームカミングデーにあわせて開催致します。11月のリユニオンは会員の横の交流として学年の5N周年同窓会を2次会として企画くださるよう期待致しております。今年の5N周年はS28, 33, 38, 43, 48, 53, 58, 63, H5. 10, 15年卒業の皆様です。

ホームカミングデーでは、興味ある企画が計画されます。ご参加の皆様には大学が記念品も用意いたしております。卒業生の皆様がキャンパスに集い、ゼミの同窓生会員とまたクラスメートとの再会と出会いの中でいっそう母校とのきずなを深めていただきたいと思います。願っております。

工学部同窓会東京支部設立準備報告

同志社東京校友会(同志社校友会東京支部)報告をDoKo ネット8号で照会くださった野崎哲郎氏(S37工卒)を含め小原肇氏(S46工卒)を中心に工学部同窓会東京支部設立の準備が進められており、2007年8月東京にて準備会を持ちました。今後の進め方が幹事会で議論されております。

京田辺キャンパス・工学部近況

医心館竣工

2008年4月からスタートする生命医科学部の建物（表紙の写真）が2008年3月28日に竣工します。建物総面積は189,898m²。3棟からなり北棟は1-6階建て、南棟は地下1階から5階建てで研究室と研究実験室が用意され、特殊実験棟は2階建てで動物実験と放射線実験が行われる。建物の名称は「医の心を耕す」「医の心を科学する」という同志社独自の教育姿勢を館名でも鮮明に表すため、新たなる「知の創造」の場になるように「同志社大学設立の旨意」の中から「智職を運用するの品行と精神とを養成せんことを希望するなり」とあり新島のいう「品行と精神は」「心」に相当することからも、館名に「心」が入れられた。各学科紹介で教務主任の先生方からの説明がありますように、工学部各学科から合計13名の先生方が移籍されます。



参加者と工学部の先生方

ひらめき☆ときめきサイエンス開催

2007年12月15日 エネルギー変換研究センターにおいて開催された「ひらめき☆ときめきサイエンス～次世代クリーンエンジンの開発研究～」には、中・高校生の26名が参加しました。昨今のエネルギー問題とエンジンの最新動向に関する講義、燃焼動力実験などの多彩なプログラムを通じ、参加者はエンジンに対する理解と知識を深めることができました。



実習実験風景

御願い

同窓会運営協力金（年会費）は2,000円となっております。同窓会運営費予算捻出に是非ご理解いただき2008年度年会費のお振り込みを下記的方式でお願い致します。なお、2007度の会費を未納の方は併せてご送金の御協力をお願い申し上げます。

また、2007年度発行のCD名簿も僅かですが残部もございますので、ご購入ご希望の方は払込取扱票をご使用いただくか、事務局まで御連絡いただけますようお願い申し上げます。

工学部同窓会年会費 2,000円納入方法（振込用紙利用）

1. 郵便振替 00990-0-151193：同志社大学工学部同窓会
2. 銀行振込 南都銀行京田辺支店(店番740) 普通預金口座 218806
口座名 同志社大学工学部同窓会 代表者 岡 正太郎
★同志社工学会の年会費はなくなりました。

同志社大学ホームページアドレス <http://www.doshisha.ac.jp/>

工学部同窓会ホームページアドレス <http://dokonet.doshisha.ac.jp/>

2008 年度理工学部同窓会総会
2008 年 4 月 26 日(土)
11時から
京田辺キャンパス夢告館 MK101

参加申し込み方法
2008 年 4 月 12 日(土)正午までに
電子メール dkk@mail.doshisha.ac.jp
もしくは fax 0774-65-6850

同志社大学 京田辺キャンパス

〒610-0321 京田辺市多々羅都谷1-3

工学部・工学研究科事務室 Tel:0774-65-6200 Fax:0774-65-6800

理工学研究所事務室 Tel:0774-65-6220 Fax:0774-65-6804

同志社大学工学部同窓会へのご質問、ご意見あるいは
本冊子「DoKoネット」へのご投稿をお待ちしております。
同窓会事務局あてご自由に連絡、投稿下さい。

2008 年 3 月 22 日発行

同志社大学工学部同窓会(同志社大学理工学部同窓会)

発行者:岡 正太郎

〒610-0321 京田辺市多々羅都谷1-3 同志社大学工学部内

工学部同窓会事務局 Tel:0774-65-6219 Fax:0774-65-6850

印刷:(有)木村桂文社 Tel:075-381-9784 Fax: 075-381-1510